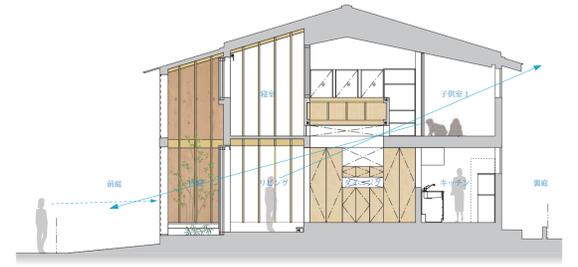
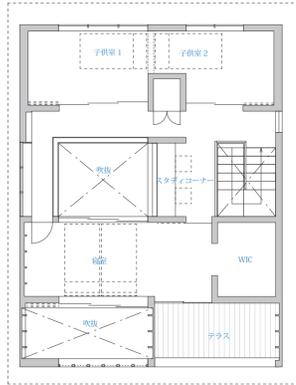
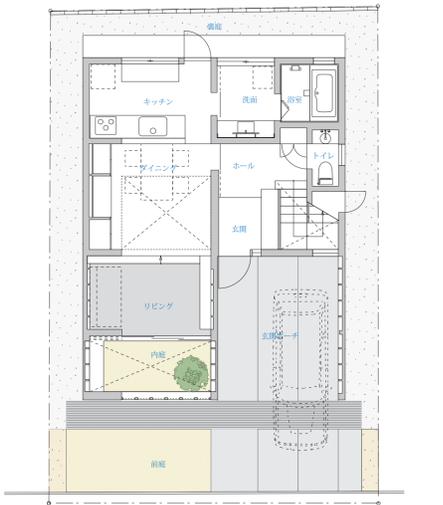
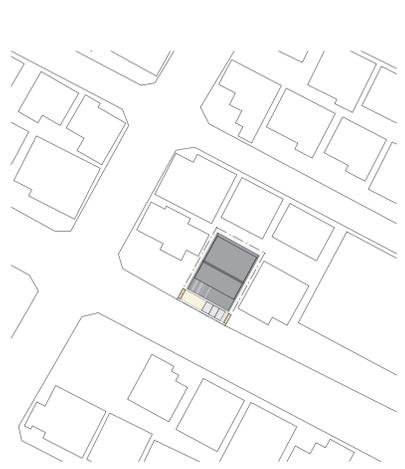


20年住宅



南北断面図 S=1:100

配置図 S=1:600

1階平面図 S=1:100

2階平面図 S=1:100

街に対して大きく開くのではなく、また閉じて内向的な世界をつくるのではなく、外部が内部に少しずつ染み入るような空間をつくりたいと思った。
敷地は南側の前面道路しか開くことができず、敷地面積が小さいため道路から引き取ることもできない。また道路は工場へつながるため通行量が多い。
そういった環境において導き出した回答はガラス戸と網戸の間に空間（内庭）をつくるということである。光や風と多少の雨が入る半外部空間で、人の出入りできない。網戸の室内側が少し暗くなることで、昼間は中から外はよく見え、外からは見えにくい。内庭には木が植えられ、三和土の土間で、壁や床はラーチ合板などの構造材あらわしというラフな仕上げである。ここでは子供が安全に遊ぶことができる。内庭につながるコンクリート土間のリビングや2階寝室は柱や梁の間だけ仕上げられた状態で、ラーチ合板よりやや肌理の細かいラワン合板が貼られた半内部的空間である。
次のダイニングや2階スタディコーナーは家具や手すりにラワン合板よりさらに肌理の細かいシナ合板が貼られ、より内部化されている。一番奥の白いPタイル床のキッチンや水回り、2階子供室の建具や家具はポリ合板で仕上げられていて、北側の暗さをやわらげている。このように南から北に行くにしたがって仕上げレベルがグラデーション的に内部化（肌理の細密化）される。明るさの違う4つの層を重ねることで奥をつくり、居場所の性格づけをしている。大開口やコートハウスとは違って都市に構えずに自然な連続性を試みた。

